

## 短 報

鈴木三男<sup>1</sup>・小林和貴<sup>1</sup>・吉川純子<sup>2</sup>・佐々木由香<sup>3,4</sup>・能城修一<sup>4</sup>：  
東京都新宿区南元町遺跡から出土した布袋に入った江戸時代の茶Mitsuo Suzuki<sup>1</sup>, Kazutaka Kobayashi<sup>1</sup>, Junko Yoshikawa<sup>2</sup>, Yuka Sasaki<sup>3,4</sup> and  
Shuichi Noshiro<sup>4</sup>: Tea of the early modern Edo period contained in a cloth bag  
excavated from the Minamimotomachi site, Shinjuku, Tokyo

**Abstract** A cloth bag of the early modern Edo period (the latter half of the 18th century) was excavated from the road remains of the Minamimotomachi site, Shinjuku, Tokyo. This bag contained stems and leaves of plants. The material of the cloth bag was anatomically identified as fibers of the hemp (*Cannabis sativa* L.). From the plant morphological and anatomical studies, the contents of the bag were identified as stems and leaves of the tea plant (*Camellia sinensis* (L.) Kuntze). These results agree well with the description in the historical literature that, during the Edo period, commoners drank tea by boiling tea leaves in hemp bags in a pot.

## はじめに

茶はアジアを代表する世界的な飲み物であるが、その起源は中国にある。チャノキ *Camellia sinensis* (L.) Kuntze は中国の黄河以南の各州に広く分布する (傳・洪, 2000) とされているが、いずれの地域でも古くから茶の栽培がなされており、また容易に野生化するののでこの分布域は本来の自生地よりかなり広いと考えられる (Min, 2007)。日本での茶の利用は、805年に唐から帰国した最澄がチャノキの種子を持ち帰り比叡山の坂本に植えたのが始まりという (河添, 2014)。空海をはじめ、留学僧永忠なども茶を広め、平安時代には上流階級に広まったとされるが、庶民までには至らなかったという (河添, 2014)。

庶民が茶を飲むようになったのは江戸時代になってからとされ、江戸時代中期ごろからは番茶を茶袋に入れ鍋や釜で煮だして飲んでいたという (伊藤, 1978b)。

東京都新宿区南元町の南元町遺跡の3次調査 (2014年) で発掘された江戸時代の道路遺構の路盤から布製の袋が出土した (国際文化財株式会社, 2015)。この布袋の中には円柱状の茎の破片と葉の破片が多量に入っていた。茎について外部形態を観察すると共に横断切片を作製して組織構造を観察した結果、チャノキ、つまり茶の茎であると同定して報告した (小林ほか, 2015)。その後、遺物を再び

実見し、内容物の試料を新たに得て詳細な検討を行った結果、江戸の町人層や下級武士等の一般的な都市住民が日常用いていた「番茶」と茶袋であると考えに至ったのでその詳細をここに報告する。

## 南元町遺跡と布袋が出土した道路遺構の概要

南元町遺跡 (新宿区南元町 23: 新宿区 No. 140) は武蔵野台地を構成する舌状台地の1つ、淀橋台を下刻する小谷底に立地し、現標高は約 17 m である (図 1)。3次調査地点の北側部分は永井家屋敷地で、南側が元鮫河橋仲町、更に南が元鮫河橋表町である。この地域はもとは田園地帯であったが、徳川家康の入府 (1590年) 後、これに付き従った伊賀者 200 人に下賜された土地である伊賀者給地となり、明暦 (1655~58年) の頃には百姓町屋となったという (村田, 2015)。調査区中央部を東西方向に走る道路遺構 (096号遺構) は西側の崇源寺の敷地に突き当たって南に屈曲することが「御府内沿革図書」に描かれている (国際文化財株式会社, 2015)。この道路は低湿地にあるため、繰り返し路盤のかさ上げが行われ、最下の道路面 (16面) は標高約 13m、最上の道路面 (1面) は 15.6 m で、2.6 m の土層に 16 の路面が検出されている (図 2)。出土遺物の検討から 16 面は 17 世紀後葉以前、1 面は 19 世紀中葉

<sup>1</sup> 〒 980-0862 宮城県仙台市青葉区川内 12-2 東北大学植物園

Botanical Gardens, Tohoku University, Kawauchi 12-2, Aoba, Sendai, Miyagi 980-0862, Japan

<sup>2</sup> 〒 989-0916 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉字七日原 293-6 古代の森研究舎

Ancient Forest Research, Tohgatta-onsen Nanokahara 293-6, Zao-machi, Miyagi 989-0916, Japan

<sup>3</sup> 〒 335-0016 埼玉県戸田市下前 1-13-22 1F 株式会社パレオ・ラボ

Paleo Labo Co., Ltd., Shimomae 1-13-22, Toda, Saitama 335-0016, Japan

<sup>4</sup> 〒 101-0064 東京都千代田区猿樂町 1-6-3 明治大学黒耀石研究センター

Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, Sarugaku-cho 1-6-3, Chiyoda, Tokyo 101-0064, Japan

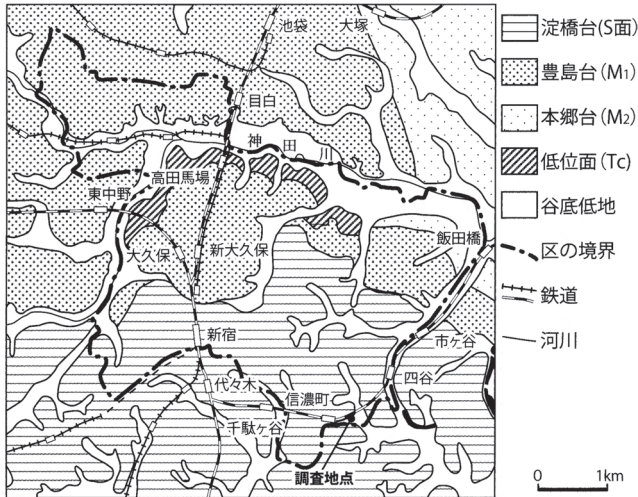


図1 南元町遺跡の位置 (国際文化財株式会社 2015 より)。  
Fig. 1 Location map of Minamimotomachi site, Shinjuku, Tokyo (after Kokusaibunkazai Co. Ltd., 2015).

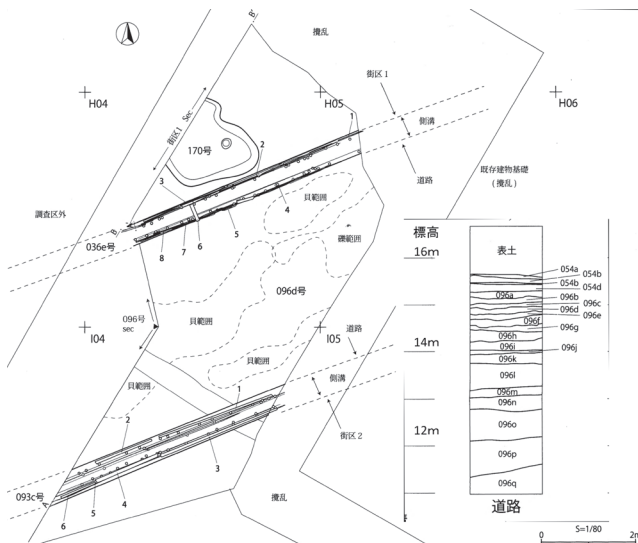


図2 096号道路遺構の平面図および土層断面図 (国際文化財株式会社, 2015 を改変)。

Fig. 2 A plan and a sectional view of the road remain No. 096 (after Kokusaibunkazai Co. Ltd., 2015).

以降とされ、明治19年(1886年)に官有地として買い上げられるまで200年ほどの間、道路として使われていたとされる(国際文化財株式会社, 2015)。

布袋は、6面を構成する096d号路盤遺構から出土した。路面の北側と南側には針葉樹製の側板と杭からなる側溝が検出されており、路面には貝殻や礫が敷設されている。路盤は、木片を大量に含んでおり、布袋はこの路盤から出土した。当時、側溝に溜まった泥土やゴミを掘りあげて路盤づくりが行われていたとされ(国際文化財株式会社,

2015)、布袋は側溝に捨てられたか、誤って落とされたものである可能性がある。共伴する陶磁器などの出土遺物から路盤の形成時期は18世紀後葉と見積もられている(国際文化財株式会社, 2015)。

#### 出土遺物、試料と方法

素材の同定を行った資料は、096d号路盤遺構から出土した布袋(試料番号MM-909)とその内容物(試料番号MM-951)である。布袋は残存長17.8cm、幅11.5cmの長方形の袋状で、口縁はほつれている(図3A)。袋状の形態から報告書では巾着袋と推定されているが(国際文化財株式会社, 2015)、口縁部の破損により巾着であるかどうかの判断はできないので本論では単に「布袋」とする。布は平織で、太さ1mmほどの糸で織られている(図3C)。1cmに緯糸は7段程度。内部に明褐色の内容物が存在することを破損箇所から観察できる(図3D)。

水浸状態で保管されていた布袋から、織り糸の長さ5mmほどの小片を切り取り、同定用試料とした。採取された試料は、デジタルマイクロスコップ(Hirox KH-7700)で外形を観察した後に、アセトンの上昇系列により脱水してエポキシ樹脂(Agar Scientific社, Low Viscosity Resin)に包埋し、回転式マイクローム(Microm社, HM350)を用いて切片(厚さ5~20 $\mu$ m)を作製した。切片はパラマウント-Nで封入して永久プレパラートにし、光学顕微鏡で観察した。プレパラートは、MM-909, 951の番号で東北大学植物園に保管されている。

また、袋内の内容物を少量とりだし、水中で葉を広げ、見つかった丸い茎は織り糸同様に脱水・包埋を行って切片を作製し、光学顕微鏡で観察した。葉は双眼実体顕微鏡およびデジタルマイクロスコップで観察した。

#### 結果

##### 1. 096d号路盤遺構出土布袋の素材植物

096d号路盤遺構出土布袋(MM-909)の経糸と緯糸は、数百本の枝の無い直線状の繊維が緩く撚られたもので(図3E)、個々の繊維は太さ20~50 $\mu$ mほどで断面は円~楕円~角の丸い多角形をしている(図4A)。この繊維は厚さ2~4(平均3.1) $\mu$ mの黒褐色で不透明な膜状の物質で覆われ、中に単独あるいは2~5個の繊維細胞の束がある(図4B, C)。この繊維細胞は断面径が7~18 $\mu$ mほどの円~楕円~角の丸い多角形で、壁が厚く中心にわずかな内腔がある。

以上の形態から、出土布袋(MM-909)は、植物性の繊維細胞を数百本束ねて緩く撚り(S撚り)をかけた太さ1mmほどの糸で織られていたといえる。素材の繊維細胞は、断面形状が円~楕円~角の丸い多角形で、壁が厚く、中央



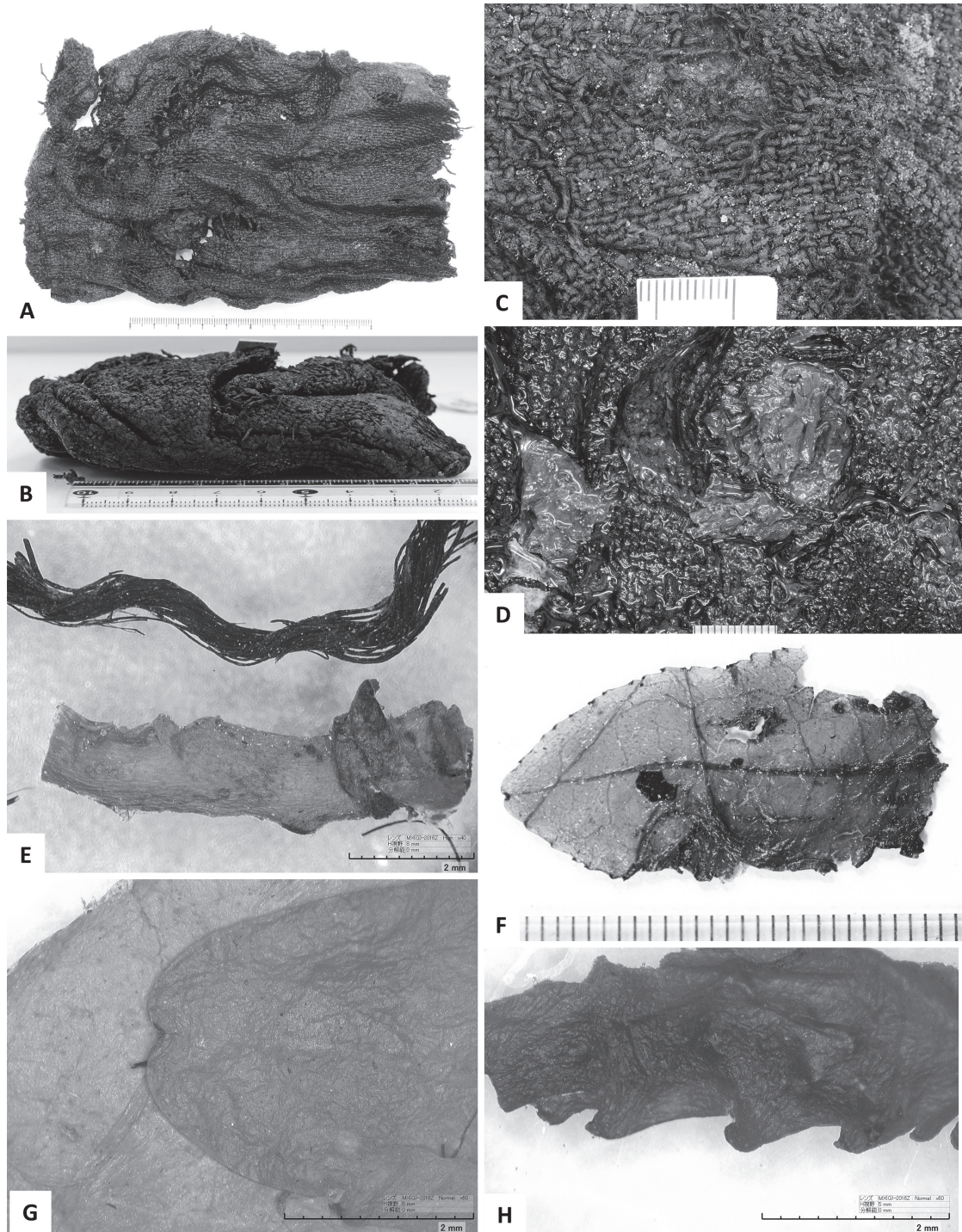


図3 南元町遺跡 096d 号路盤遺構から出土した布袋 (MM-909) とその内容物 (MM-951)。A, B: 出土布袋の上面および側面観。C, D: 出土布袋の織りと破れ目に見える内容物。E: 切片を作成した布袋の糸 (上) と円筒状の茎。F ~ H: 内容物の葉の破片。F: 中肋と二次脈, 網状脈からなる脈系と葉縁の波状鋸歯。G: 円頭凹端の葉先と葉裏面の腺点。H: 葉縁の拡大。波状の鋸歯の先端は内がわに曲がる。スケール: A ~ D, F の最小目盛は 1 mm; E, G, H の最小目盛は 0.2 mm。

**Fig. 3** Cloth bag (MM-909) and its contents (MM-951). A, B: Top and side views of the cloth bag. C, D: Weaving of the cloth bag and contents seen through holes. E: The thread of the cloth bag (top) and a cylindrical stem that produced the thin section. F-H: Leaf fragments of the contents. F: Reticulate venation system with a midrib and secondary veins, and undulately serrated leaf margins. G: Concave leaf tip and glands on the under surface of a leaf. H: Magnified leaf margin. Tips of the undulate serrations turn inward. Unit scales in A-D, F = 1 mm; unit scales in E, G, H = 0.2 mm.



表1 出土葉および現生ツバキ属3種の葉裏の腺点と腺点上の毛の密度 (/mm<sup>2</sup>)

Table 1 Density of glands and gland hairs on the under surfaces of excavated leaves (MM-951) and three extant species of *Camellia* (/mm<sup>2</sup>)

分類群名	採取地点	採取月	腺点	毛
ヤブツバキ	宮城県白石市白石城公園	6月	70	0
サザンカ	宮城県白石市白石城公園	6月	54	0
サザンカ	宮城県仙台市東北大学植物園	6月	41	0
チャノキ	京都市右京区梅尾町	2月	80	53
チャノキ	京都市右京区梅尾町三本木茶園跡	2月	81	38
チャノキ	京都市北区中川川登	2月	121	34
出土葉	東京都新宿区南元町遺跡	—	132	28

に小さい細胞内腔を持つことから植物性の繊維である。繊維細胞は単独あるいは数本がまとまっているため、アサ *Cannabis sativa* L. (アサ科) の繊維と同定した。この繊維を覆っている黒褐色の膜状の物質が何であるかは不明である。

## 2. 096d 号路盤遺構出土布袋の内容物の同定

096d 号路盤遺構から出土した布袋の内容物 (MM-951) のうち、茎試料は直径 0.8 ~ 1.5 mm、長さ 12 mm ほどの円柱状で、片端側はほぼ平滑な円柱、もう一端側は葉の脱落した痕や葉の基部の構造が見られる (図 3E)。円柱状の部分の断面はほぼ円形、剥離した皮層と円筒状の木部がある (図 5A)。皮層最外部には表皮は残存していない。皮層には内外の潰れた組織に挟まれて 1 ~ 3 細胞層のほぼ円周状に連続した繊維組織がある (図 5B)。繊維細胞は断面が長径 8 ~ 25 μm、短径 8 ~ 20 μm ほどの丸みを帯びた多角形で、細胞内腔はやや大きい。木部は中央に非常に大

きな髄を持ち、髄の細胞は一次木部に接する外周部では比較的小さいが、髄の中央では薄壁で非常に大きい細胞群が占め、それに混じって径の小さい柔組織が縦に連なった形で混じる (図 5B, C)。時に厚壁異形細胞が混じる (図 5C 矢印)。一次木部は髄の外周部に同心円状に多数が配列する。二次木部は厚さ 70 μm ほどのリング状で (図 5A, B)、年輪界は無く、道管断面は薄壁多角形で、小径の道管がほぼ単独でまばらに散在する散孔材である。二次木部の道管の穿孔は横棒が 10 ~ 20 本程度の階段状、放射組織は 2 細胞幅程度で比較的背は高く、異性、結晶細胞は認められない。

布袋内容物の大部分は葉の破片である (図 3D)。破片は比較的大きいものも含まれ、楕円形~卵状楕円形をした葉の概形がわかり、直線状に走る中肋、波状鋸歯の葉縁、丸みを帯び頂部が円頭凹端となる葉の先端 (図 3G) などが認められる。葉の質は比較的薄く、葉面に葉脈が見え、脈系は中肋から二次脈が分枝し、網状脈を形成している (図 3F)。葉縁にはかなり規則的な波状鋸歯があり、鋸歯の先端に猫爪状の濃褐色の突起がある (図 3E, H)。葉裏に濃色の腺点が多く分布し、その半数近くに毛が残っている (表 1)。

以上の外部形態及び茎の内部構造から出土布袋の内容物はツバキ科ツバキ属のチャノキ *Camellia sinensis* (L.) Kuntze と同定した。日本列島にあるツバキ属の種には、自生のヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. やサザンカ *Camellia sasanqua* Thunb., ヒメサザンカ *Camellia lutchuensis* T. Itô の他、中国大陸より渡来し、広く栽培され、また野生化しているチャノキがある。これらの葉の基本的な形態は同じだが、葉の概形や、質 (厚さ)、葉先端や鋸歯の形態などで少しずつ異なっており、本出土試料は葉の

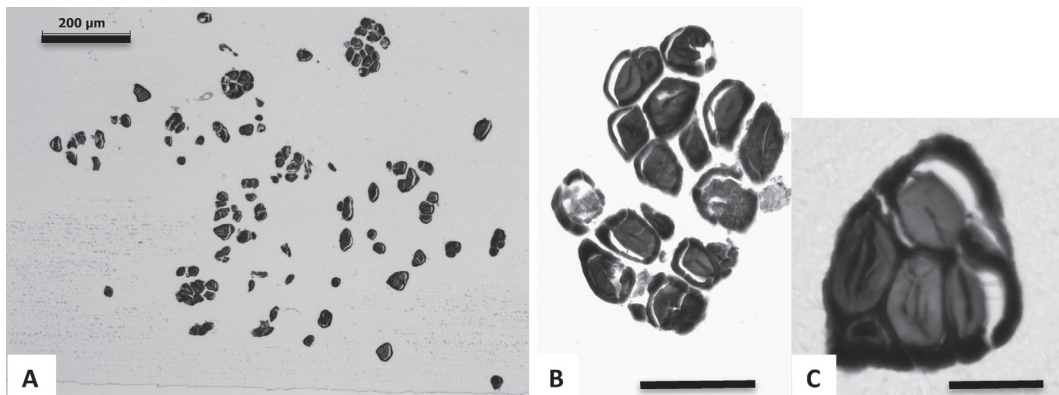


図4 出土布袋 (MM-909) の繊維の顕微鏡写真。繊維は多くは1細胞で、2~5細胞程度がまとまったものもある。各細胞あるいはそれが集まったものは黒褐色の膜状の層で覆われている。スケールバー: A = 200 μm, B = 50 μm, C = 20 μm。

Fig. 4 Microphotographs of fibers of the cloth bag (MM-909). A lot of fibers consist of one cell, and some others of two to five cells. Each cell or cell group is covered with a dark brown film-like layer. Scale bars in A = 200 μm, B = 50 μm, C = 20 μm.

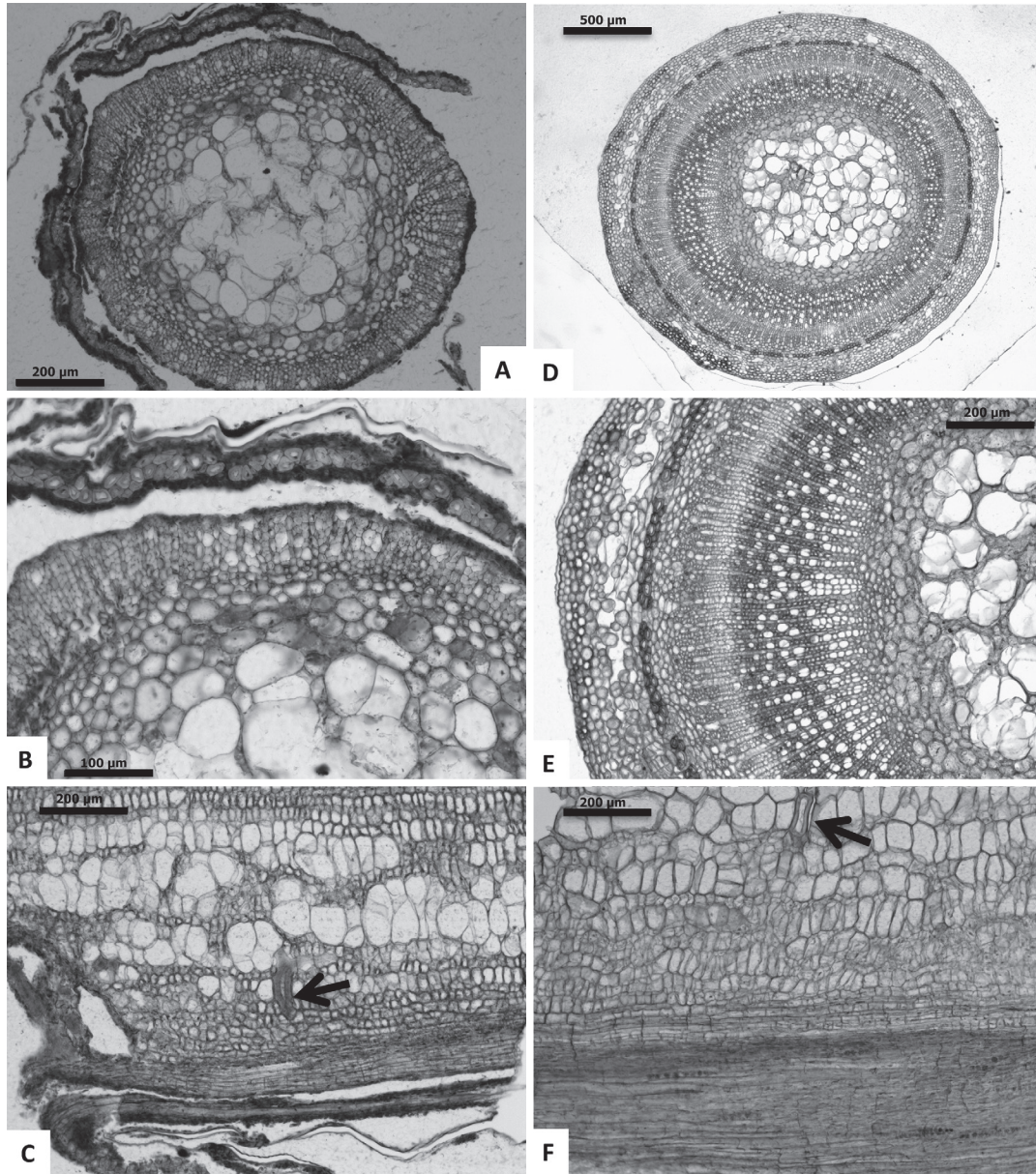


図5 MM-951の茎(A~C)と現生チャノキ(D~F)の茎横断面(A, D)とその拡大(B, E), および縦断面(C, F). A: 大きな細胞からなる中実の髓に円環状の一次木部+二次木部があり, 表皮, 皮層は剥がれている. B: 二次木部はわずかの量で年輪は無い. 表皮はクチクラのみ, 皮層は円環状の繊維組織部分のみが残っている. C: 髓は大きな細胞の列と小さな細胞の列が別々にある特徴的な構造で, 厚壁異形細胞(矢印)が時々混じる. D, E: 二年目の春, 新しい茎葉が出た頃の前年枝. 髓には大きな細胞が集まった部分と小さな細胞が集まった部分が混在する. 二次木部は不明瞭な1年目の年輪界の外側に新たに形成され, また充分に木化していない二次木部がある. 皮層には繊維組織が円環状にある. F: 髓は大きな細胞の列と小さな細胞の列が別々にある特徴的な構造で, 厚壁異形細胞(矢印)が時々混じる. 染色はトルイジンブルー. スケールバー: A, C, E, F = 200 μm, B = 100 μm, D = 500 μm.

**Fig. 5** Cross and vertical sections of MM-951 (A–C) and *Camellia sinensis* (D–F) stained by Toluidine Blue. A: Cross section of the stem of MM-951 with a large solid pith, primary xylem arranged on the circumference, cylindrical secondary xylem, and cortex and epidermis detached from the secondary xylem. B: Secondary xylem without growth rings and bast fibers of the cortex and with very minute vessels. C: Pith consists of large parenchyma cells, lines of vertically aligned small cells, and sporadic sclereids (arrow). D, E: Cross section of two-years old stem of *Camellia sinensis* in spring with small amounts of secondary xylem having very minute vessels. A large central pith with large and small parenchyma cells, primary xylem on its circumference, cylindrical secondary xylem, cortex with a thin fiber layer and epidermis. F: Pith consists of large parenchyma cells, lines of vertically aligned small cells, and sporadic sclereids (arrow). Scale bars in A, C, E, F = 200 μm, B = 100 μm, D = 500 μm.



長楕円形の概形と比較的薄い葉質、先端の円頭凹端、波状鋸歯、そのいずれにおいてもチャノキに最もよく一致する。さらにヤブツバキとサザンカは開葉時の先端部分で腺点上に長毛があるがのちに無毛となるのに対し、チャノキはヤブツバキなどより腺点数がやや多く、腺点上の毛は葉全体に分布していて開葉後成長しても4分の1近くの腺点上に毛が残っている。出土した葉は1 cm<sup>2</sup>当たりの腺点数が明らかに多く、葉全体の腺点上の4分の1近くに毛が残っていることもチャノキであることに良く一致する(表1)。一方、葉に混じていた茎は樹木の当年枝で、断面が丸く、皮層に環状の繊維組織があり、二次木部は断面多角形の小道管からなる散孔材で放射組織は異性で幅狭く、結晶細胞は認められない。現在栽培されているチャノキの前年枝の茎をみると(図5D-F)、二次木部に年輪界があつて2年目の二次木部が既に形成されていることを除いて、皮層の環状の繊維組織や、大きな細胞が大部分を占める大きな髄、厚壁異形細胞の存在など、出土試料に極めて良く一致する。ツバキやサザンカなどの放射組織は背が低く、また前者では特徴的な結晶細胞を持つことなどで出土試料とは異なっている。これらの特徴から布袋内の「茎」もチャノキの茎と同定した。

### 考 察

中国でチャノキの葉を飲用としたのはいつの時代からかは不明だが、浙江省余姚市の田螺山遺跡では同じ層準面から掘られた3カ所の土坑それぞれに20～50本ほどの直立したツバキ科の根材がまとまって出土しており(中村, 2010)、その1本での放射性炭素年代測定値は4680 ± 40 yr BP (IAAA-8328)であった(中村ほか, 2010)。材構造からはチャノキとは断定されていないが、出土状況から茶の木を植栽した可能性が考えられている(鈴木ほか, 2010)。8世紀頃に著されたといわれる陸羽の「茶経」にはチャノキの植物学的側面から始まって、茶葉の採取や様々な道具類、茶葉の処理の仕方、飲み方、薬効などが詳しく書かれており、すでに茶葉を飲用とする利用体系が確立していたことがわかる(布目, 2012)。日本列島では縄文時代や弥生時代、古墳時代の遺跡からもチャノキの種子の出土が報告されているが(石田ほか, 2016; 国立歴史民俗博物館, 2017)、史料上では、日本に渡来したのは805年とされ(河添, 2014)、中国の茶の文化という形でもたらされたのは平安時代の初期ということのようだ。

江戸時代には抹茶や煎茶、番茶など多様な茶があり、様々な飲み方がされるようになった。抹茶は「茶道」に象徴されるように上流階級で、煎茶は上～中流階級でたしなまれ、下級武士と町人、農民はもっぱら番茶であったという(伊藤, 1978a, b; ケンペル, 1727など)。番茶には伸びきり

硬くなった枝葉を刈り取って作るもの、荒茶の精製中に選別されたもの、それに農家が自家用に作った茶など、様々なものがある(坂本, 2009)。江戸時代の番茶の飲み方は、茶葉を直接か、布袋に入れて鍋や釜で煮出す「煎じ茶」であった(ケンペル, 1727; 長佐古, 2010)。時期は今回の出土遺物より後になるが、幕末から明治時代にかけての自らの生活を記録した山本(1912)は麻袋に番茶を入れて釜で煮だして飲んだと記述している。茶袋には木綿なども使われたが、麻袋が一般的であったようだ。

南元町遺跡3次調査の096d号路盤遺構から出土した布袋の織り糸の素材植物はアサで、その内容物はチャノキの枝葉、すなわち「茶」と判明した。南元町遺跡は伊賀者給地のひとつで、江戸勤番の伊賀者がここに住み、「薄給」の身で半農半武士のような生活をしていたという(村田, 2015)。出土した茶袋はそういった下級武士が日常用いていた可能性が考えられる。

今回出土した布袋はアサ製であり、中身は茶葉であることから、番茶を煮出す茶袋と判断できる。そしてこのアサの繊維は黒褐色の膜状の物質でコーティングされていた。当初は漆塗りの可能性を考えたが、横断面の顕微鏡観察で通常の漆塗膜のような透明感が無いこと、漆塗膜の場合、表面は平滑であるのに本試料ではざらついていることから、他の物質と考えるようになったが、何であるかは不明である。可能性としてはこの茶袋が何度も使われたことにより茶渋、すなわちタンニンがアサ繊維の表面に付着した可能性が考えられるが、それを確かめる分析は行っていない。この布袋にはチャノキの茎と葉が入っていた。番茶には荒茶の選別で煎茶とならなかったものもあるが、伸びきった枝葉ごと用いているのが大部分である。煎茶は茎が未だ柔らかくて容易に摘み取れる時期のもので、二次木部の形成は進んでいないのに対し、番茶では茎は伸びきり、二次木部が十分形成されて硬くなっている。麻袋に入っていた茎(MM-951)の二次木部の厚さは70 μmあり、未だ二次木部の形成途中ではあるが十分に硬くなっており、まさに「番茶」であるといえる。

茶葉の出土例や植物解剖学的な同定例はこれまでなかった。麻の袋に入った番茶という結果は引用した江戸時代の茶に関する文献史料と良く一致し、人びとの生活の中における植物利用の実証の一つとなったと言える。

調査にあたり、新宿区教育委員会榎木真氏、国際文化財株式会社惟村忠志氏にお世話になった。茶袋については、鳥取県史編さん民俗調査委員の谷阪智佳子氏のご教示から着想を得た。京都市在住の辰巳尚隆・辰巳香澄両氏には京都市内の現生チャノキ標本及び京番茶試料を送っていただいた。静岡県埋蔵文化財センター伊藤純子氏には現生チャ

ノキの生試料を送っていただいた。千葉大学附属図書館の田川裕美氏には茶に関する文献をご教示いただいた。記して謝意を表す。

本研究は日本学術振興会による科学研究費基盤研究（A）「日本の縄文・弥生時代遺跡出土編組・繊維製品等素材の考古植物学的研究」（2013～2015年度、代表鈴木三男）の研究成果の一部である。

## 引用文献

- 傅 立国 (Fu, L.)・洪 濤 (Hong, T). 2000. 中国高等植物, 第四卷: 594. 青島出版社, 青島.
- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原 新. 2016. 日本の遺跡出土大型植物遺体データベース. 植生史研究 24: 18-24.
- 伊藤うめの. 1978a. 煎茶. 「図説江戸時代食生活事典」(日本風俗史学会編), 227-228. 雄山閣, 東京.
- 伊藤うめの. 1978b. 番茶. 「図説江戸時代食生活事典」(日本風俗史学会編), 325-326. 雄山閣, 東京.
- ケンペル, エンゲルベルト (Kaempfer, Engelbert) (今井 正, 訳), 1727 (1973). 日本誌 (The History of Japan), 下巻, 184-185, 500-524. 霞ヶ関出版, 東京.
- 河添房江. 2014. 唐物の文化史—舶来品から見た日本. 238 pp. 岩波新書, 東京.
- 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男. 2015. 南元町遺跡3次調査出土繊維製品等の素材植物. 「東京都新宿区南元町遺跡Ⅲ」(国際文化財株式会社編), 248-254. 住友不動産株式会社・国際文化財株式会社, 東京.
- 国際文化財株式会社, 編. 2015. 東京都新宿区南元町遺跡Ⅲ. 住友不動産株式会社・国際文化財株式会社, 東京.
- 国立歴史民俗博物館. 2017. 日本の遺跡出土大型植物遺体データベース. [https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/issi/db\\_param](https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/issi/db_param) (2017年10月1日参照)
- Min, T. (閔 天祿). 2007. *Camellia*. "Flora of China" (Wu, Z., Raven, P. H., & Hong, D., eds.), vol. 12: 367-412. Science Press, Beijing.
- 村田香澄. 2015. 鮫ヶ橋地域における中世村落から明治20年までの土地利用. 「東京都新宿区南元町遺跡Ⅲ」(国際文化財株式会社編), 279-288. 発行所住友不動産株式会社・国際文化財株式会社, 東京.
- 長佐古真也. 2010. 日常茶飯事のこと. 「江戸文化の考古学」(江戸遺跡研究会編), 99-126. 吉川弘文館, 東京.
- 中村慎一. 2010. 河姆渡文化研究の新展開. 平成18-21年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究」(中村慎一編), 1-14. 金沢大学, 金沢.
- 中村慎一・秦 嶺・孫 国平. 2010. 放射性炭素年代報告(2). 平成18-21年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究」(中村慎一編), 263-264. 金沢大学, 金沢.
- 布目潮瀧(全訳注). 2012. 陸羽『茶経』(8世紀頃). 459 pp. 講談社, 東京.
- 坂本孝義. 2009. 記録に見る番茶の多様性. 茶業研究報告 2009 (108): 91-108.
- 鈴木三男・鄭 雲飛・能城修一・大山幹成・中村慎一・村上由美子. 2010. 出土木材の樹種同定. 平成18-21年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究」(中村慎一編), 215-250. 金沢大学, 金沢.
- 山本政恒(吉田常吉校訂). 1912 (1986). 幕末下級武士の記録(附録 天保明治之間), 38. 時事通信社, 東京.
- (2017年11月14日受理)